

## 確かな学力の育成と評価の在り方

— 他者の言葉を「受け止め、考え、表現する」サイクルを活かした「読むこと」の授業について —

石川 嘉一 西木 英里 田中 宏幸 小西いずみ

### 1. はじめに

平成19年に改正された学校教育法第30条第2項において、義務教育では「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」としている。ここに「基礎的な知識・技能」「思考力、判断力、表現力」「学習意欲」という学力の重要な3つの要素が規定されている。

### 2. 研究の目的・方法

本研究は、中学校国語科において「確かな学力」の育成のため、さまざまな他者の言葉を「受け止め」ることでその中から課題を見つけ、「考え」て言葉を吟味し「表現する」サイクルを通した指導の在り方を明らかにしていく。また、生徒から表出する言葉の多様性を理解し、そこに適切な評価を行うことで、新たな学習意欲の向上につながる評価の在り方を探っていく。

本年度は、今まで積み重ねてきた研究を基盤として、各領域を関連付けた授業を計画する。また、実践にあたっては、「考え」た成果をまとめ、多くの人の前で「表現」できる力を養えるようにする。評価については、自己評価・他者評価を織り交ぜながら、学習意欲の向上につながるようにしていく。その上で、他者の言葉とのかかわり合いによる授業が、知識や技能のみではなく、学ぶ意欲や、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等の「確かな学力」の育成に有効であったかを附属学校と学部共同で検証する。

〈実践1〉—7年「姫の物語? 翁の物語?—竹取物語」  
(学校図書中学校国語1)

#### (1) 授業の構想

##### ① 単元について

小学校から和歌や俳句など古典の原文にふれる学習がわずかながら行われている。しかし、一つの単元として向き合うのは、中学生となってこの単元が初めてである。本単元は、古典を理解する基礎を養い、古典に親しむ態度を育てることをねらいとして設定されている。「竹取物語」は、「かぐや姫」の物語として絵本などを通して広く知られている作品であり、古典学習の導入教材としてふさわしい。とはいえ、物語の全体像を知る生徒は少ないため、古典を現代語訳と合わせて通読し、「竹取物語」の面白さや登場人物について感じたこと等を交流することを通して、古典の世界に触れる楽しさや意義を感じさせる必要がある。

また、音読を通じて原文のリズムに慣れさせたり、登場人物を通して美しいものへの憧れや異世界への好奇心、人間の持つ欲望、喜びや悲しみなど、今も昔も変わらない人間の心情に触れさせたりすることで、古典に興味と親しみを持たせることができる教材であると考えられる。

指導にあたっては、古典は人々に親しまれている昔話の中や身近な現代語の中にも息づいており、古典を学ぶことはそれらをより深く理解したり、親しんだりするための手段であると気づかせたい。古典学習への抵抗感を感じる要因として、生徒にとって古典の世界と現代とが切り離されたものとなっていることが挙げられる。したがって、古典の世界と現代とがつながったものであることに気づかせ、現代語訳を活用しながら心情を読み取らせ、楽しみながら古典にかかわるような授業を目指す。また、登場人物を通して、当時の人々のものの見方や考え方を読み取り、現代との共

---

Yoshikazu Ishikawa, Eri Nishiki, Hiroyuki Tanaka, and Izumi Konishi,: A study of the development and evaluation of solid academic abilities. — A practice approaches to the reading abilities through others expressions and languages. —

通点・相違点について考えさせながら、自分自身の考えを広げさせたい。

②目 標

- 古典にふれることの意義を理解し、進んで話し合い活動に参加している。
- 場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容の理解に役立てている。
- 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くしている。
- 文語の決まりや訓読の仕方を理解し、音読を通して古典特有のリズムを味わい古典の世界に触れている。

③学習計画（全8時間）

- 第1次 古典の特徴を理解する・・・2時間
- 第2次 古典「竹取物語」を読む・・・3時間
- 第3次 「五人の貴公子」について考える・・・2時間
- 第4次 人物を通して昔と現代を比較する・・・1時間

(2) 授業の実際と考察

〈第1次 古典の特徴を理解する〉

まず、「竹取物語」は「かぐや姫」の物語として絵本などを通して広く知られている作品である。そこで生徒にどんな内容かを挙げさせながら、パワーポイント（紙芝居形式）で「かぐや姫」の内容をおさえていった。また、冒頭文を音声のみで聞き取り、すべてひらがなでノートに書き取らせ、教科書の本文と比べることで、仮名遣い（歴史的仮名遣い）が異なることを見つけ、歴史的仮名遣いについて理解させていった。さらに、暗誦を行ったことにより、文の区切りや古文のリズムに慣れたことで、これから読み進めていく古文が読みやすくなっていった。

〈第2次 古典「竹取物語」を読む〉

教科書にある古文は、「冒頭文」と「月の世界から使いがやってくる場面」<sup>①</sup>、「かぐや姫が天の羽衣を着て昇天する場面」<sup>②</sup>、「昇天した後の残された人の様子」であり、話の流れが理解できるようにその他の話は、現代語で要約されたものが補足されている。しかしながら、古典を現代語訳と合わせて通読し、話自体の面白さや登場人物について感じたこと等を交流させ、古典の世界に触れる楽しさや意義を感じさせるため、教科書に加えて、「五人の貴公子とのやり取りの場面」と前述の①と②の間の話も古文で提示し読み取っていった。①と②の間も古文で補足し読解することで、月の世界にしか存在しない天の羽衣と不死の薬について知り、この世と月の世界を比較する読みにつなげることができた。「五人の貴公子とのやり取りの場面」は次時での読み取りとなる。

〈第3次 「五人の貴公子」について考える〉

五人の貴公子について、かぐや姫から出された課題と求婚の失敗について一人ずつ整理しながら読んでいった。人物像の比較をさせるためにも、かぐや姫からの課題にどのような対応をしたか要約させ、前次に出てきた天人が地上を「きたなき所」と称した理由を踏まえて貴公子の「きたなき所」もまとめていった。

さらに、五人の貴公子をきたなき順に並べ、他の人が納得するような理由を挙げさせた。まずは個人で考えさせ、それをもとに班で、最も「きたなき者」と最も「きたなくない者（清き者）」を話し合わせた。すると次のような結果となった。

最もきたなき者と最も清き者について

	最もきたなき理由	最も清き理由
石作の皇子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・うそをついて、あきらめが悪いし、しつこいから。(7班)</li> <li>・ウソもつくしニセモノも持って行くし、バレたのに言い寄っていて潔さが無いから。(10班)</li> </ul>	
庫持の皇子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニセモノを作る前提で鍛冶細工師に作らせ、お金を払わなかったから。(1班)</li> <li>・うそをついて、にせものを人に作らせて、代金を払わなかったから。(2班)</li> <li>・朝廷、かぐや姫、鍛冶細工師など多くの人にうそをついたから。(3班)</li> <li>・朝廷にもかぐや姫にもウソをつき、未払いだったから。(4班)</li> <li>・偽物を作らせ、さらにお金を払っていないから。(5班)</li> <li>・偽物を作らせ代金が未払いのまま逃げたから。(6班)</li> <li>・人に頼った、偽物を作った、未払いだから。(8班)</li> <li>・つくるといふ発想が汚い。しかも金を払わなかったから。(9班)</li> </ul>	
阿部の御主人		<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に頼っていたけど、だまされていたから。(8班)</li> </ul>
大伴の大納言		<ul style="list-style-type: none"> <li>・家来に頼ったけど、結局自分で行ったし、風病にかかり財産もとられてかわいそうだから。(3班)</li> </ul>

- ・努力をして、とろうとしていたから。(1班)
- ・自分でとろうとしたから。(2班)
- ・自分で挑戦したのにかわいそうな目に合ったから。(4班)
- ・何も悪いことをしていないから。(5班)
- ・気の毒だから。(6班)
- ・自分でやろうとしていたし、だまそうとしてないから。(7班)
- ・自分で取ろうとしたから。(9班)
- ・何も悪いことはしていないから。(10班)

個人では様々な意見があったが、班討議を行った結果きたなき者と清き者が重ならずに分かれた。理由を生徒たちに吟味させると、きたなき者は共通して「嘘をついている」「偽物を作るなどだまそうとする気持ちがある」ことが挙げられた。清き者は「だまされていた」「悪気はない」「自分で努力をした」ことが挙げられ、「嘘」や「だます」気持ちの有無、また大きさが生徒の「きたなき者」の大きな判断基準であることがわかった。



#### 〈第4次 人物を通して昔と現代を比較する〉

五人の貴公子をはじめ、かぐや姫や翁などの登場人物を通して今と昔では異なることと同じことを比較しながら考えた。異なることは、かぐや姫を知らないのに求婚していることや翁や貴公子から職業が挙げられた。同じことは、人物に対して汚いと思う基準や、人との別れが悲しいと思う心、携帯電話やインターネットがないのに情報が早いことが挙げられた。

#### 「竹取物語」(五人の貴公子) を読んでの振り返り

- ・この物語によっていろいろな言葉が生まれたのはおもしろい。
- ・竹取物語は昔の話なんだけど、今の時代にも似ていることがたくさんあるからこの話はとてもすごい。
- ・嘘をつくなど五人の貴公子がやっていることは、とっても僕たちに似ているし、自分のまわりにも五人の貴公子のような人はたくさんいると思った。
- ・五人の貴公子の汚さは、今読んで自分たちも学び、反省しなくてはいけない。
- ・汚き理由の中に嘘をつくとあったけど、今も昔も嘘をつかない人はいないと思うので、かぐや姫

- が今の人間に(課題を)出しても、この五人の貴公子のような結果になると思った。
- ・近くに五人の貴公子みたいな人がいるのは、人間だから当たり前だと思った。汚い所は人に欲があれば出ると思うし、完璧な人はいないと思った。
- ・どんなに悪い人でも、全てが悪い人はいないし、逆にどんなに清き人でも、全て完璧な人はこの世にはいないと思った。
- ・人間や天人からなどいろいろな視点で書かれているのでおもしろかった。
- ・話は空想かもしれないけど、ここまで考えてまとめているのはすごい。平安時代から現代まで、大切に受け継がれているんだなと思った。

#### なぜこのような物語が書かれたのだろうか？

- ・人間には汚い所もあるが、清い所もある。天人は、そういう汚い感情とかなないので、自分が天人だったらなどと考えたときに、人間に生まれてきて良かったと伝えたかったから。
- ・作者はこの世界を汚いと思っていて、天人になりたいと思っていたから。作者はいじめられたか、物を盗まれたか、嘘をつかれたのではないか。
- ・この時代でも、貴族や下の者の位の違いがあり、そのことに対して恨みがあり、皇子にたとえて辛い思いをさせた。かぐや姫という女性を自分の好きな女性にたとえていると、かぐや姫ができた。物語は日本で初だったため、面白い人物などいろいろ考え、みんなに楽しくなってもらいたかったから。
- ・人の汚さを表すことで世を清めようと思ったから。
- ・みんなに汚き人にはなあってほしくないから「汚き人は結局苦しい思いになりますよ。だから汚き人にはなあってはいけません。」と言いたかったから。

上記の記述のように、五人の貴公子に対してあまり良い印象を持っていなかった生徒が、五人を比較し汚き基準を考えることを通して、物語だから特別でも昔だから特別でもないことだと考えるようになった。当初は人物を通して今と昔を比較し、交流させることで単元を結ぼうと考えていた。しかしながら、作者未詳だが日本最古の作り物語である「竹取物語」がどのような意図で書かれたのかを考えさせることを付け加えて本単元の結びとした。

#### (3) 実践を振り返って

以上、述べてきたように、他者の言葉として教科書、教科書以外の文章、交流などでの意見を通して、考えを広げたり深めたりさせることができた。思考の深まりとしては、まずは個人で考え、それをもとにグループで交流させ、再び個人で考えをまとめさせることが

有効だと考える。五人の貴公子を比較した際に、グループで話し合った理由を挙げると端的な言葉となってしまった。グループ内で話し合っているときは考えが深まっていたが、全体交流では広がるが深まりにくいと感じた。全体交流の方法を、交流の意図に合わせて変えたり、新たな交流の方法を仕組んでいったりする必要がある。また、今回の主な活動の評価については、生徒一人一人の価値観や体験に基づいた意見であり、評価が曖昧となった。しかしながら、それぞれの考えを肯定する声掛けや、他とは違う視点や広い視野で考えていることへの肯定的な評価は、今後の生徒の思考を深めることにつながると考える。

〈実践2〉—9年「おくのほそ道」(学校図書中学校国語3)

(1) 授業の構想

①単元について

本題材は、中学校最後の古典として、「万葉・古今・新古今」の和歌、杜甫・王維・李白の漢詩に続くものとして設定されている。「おくのほそ道」は、松尾芭蕉と弟子の河合曾良との、半年間をかけた東北への旅に基づく紀行文である。その土地その土地で詠まれた俳句と共に、旅の情景が伝わる文章である。その冒頭部分は、「旅」に対する芭蕉のとらえ方が明確に示されている。現在の「旅」と比較して考えることに適していると考えられる。

また、「俳句」という、短く洗練された表現の中に情景や心情を込めたものを読み解くことを通して、創造的思考力を生かすことのできる題材だと言える。

指導に当たり事前アンケートを実施したところ、古文に対して「嫌いだ」と感じている生徒が56パーセントおり、その主な理由として「読みにくい」「言葉の意味が分からない」「話の内容が理解できない」と回答した。これを踏まえ、古典を嫌いだと感じている生徒に対しては、音読を取り入れて古語に慣れさせる、現代語訳を活用しながら、時には現代風に置き換えをしながら(例えば『日々旅にして旅をすみか』)にしている人とはどういう人たちか→パイロット・添乗員など)意味をつかませる、といったような手だてによって学習課題に取り組みやすくした。

指導の流れとしては、第1次の学習において芭蕉の旅したルートについて地図等で確認させ、その規模の大きさなどの全体像をつかませた。その後、まず生徒一人ひとりに「旅」に対するイメージをしっかりと持たせ、興味を持って教材へと近づけさせた。その上で、現代の「旅」に対するイメージと、芭蕉のとらえる「旅」との違いを浮かび上がらせて理解させようとした。

また、西行法師や杜甫・李白の、「旅」に生涯をかける生き方、杜甫の詩『春望』の「国破れて山河あり」の一節など、それまでの題材で取り上げた事項について思い出させながら理解を深めさせた。そして、俳句の詠まれた背景や、当時の情景などを想像しながら読み取らせた。

②目 標

○「旅」について興味を持たせて、本文を読み味わえるようにする。

○本文をもとに芭蕉の「旅」に対するとらえを読み取らせる。

○既習事項を参考に場面の情景を読み味わわせる。

③学習計画

第1次 作者や作品の全体像について……………1時間

第2次 芭蕉にとって「旅」とは何か……………2時間

第3次 「平泉」の場面を読み味わう……………2時間

(2) 授業の実際と考察

〈第1次 作者や作品の全体像について〉

まず松尾芭蕉がどのような人物であるのか、また、「おくのほそ道」がどのような作品であるのかを確認した。紀行文であること、芭蕉と曾良との半年間にわたる2500キロメートルに及ぶ大旅行に基づくものであること、旅先で作られた俳句も載せられていること、などである。その中で、2500キロメートルという距離を意識させるため、日本地図を用いて直線距離だとどこからどこまで行けるのかということを図示した。また、当時は舗装されていない山道を草鞋で歩いて行かなければならないこと、旅に出ると様々な危険があることなどについても触れた。そして、旅のルートについても地図で確認をした。

〈第2次 芭蕉にとって「旅」とは何か〉

本次では、芭蕉にとっての「旅」とはどういうものかを考えることを学習課題とした。そのために、現代に生きる生徒たちにとっての「旅」のイメージを持たせ、芭蕉のそれと比較させようとした。そこで、ひとりひとりに「『旅』とは□□である。」という文の空欄に入る言葉とその理由を考えさせ、班で交流させた。次に挙げるのは、各班の代表者の意見である。

- |            |               |      |
|------------|---------------|------|
| ・高校入試      | ・究極を極めること     | ・青春  |
| ・気分転換      | ・新たな出会いを楽しむこと |      |
| ・楽あり苦ありの人生 | ・その地を楽しむこと    |      |
| ・自立心を養うもの  | ・旅行           | ・出会い |

次に、ワークシートをもとに、芭蕉の考えを文章からとらえさせた。

#### ワークシートの問い

- (1)「日々旅にして旅をすみかとする」という人は現代で言うとどんな職業か。
- (2)「古人も多く旅に死せるあり」の部分はどういう気持ちで書いたのか。
- (3)旅への強い思いが表れている部分を古文の中から三カ所抜き出そう。
- (4)旅の準備を四つ、古文の中から十字前後で抜き出そう。

「住める方は人に譲り」の表現から、現代の旅の準備とは異なり、帰らない覚悟をしていることに気付いたようである。



そしてここで、旅のとらえを深めさせるために、旅の始めの句「行く春や鳥啼き魚の目は泪」と終わりの句「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」とを提示した。始めの句からはつらさや別れの寂しさ、終わりの句からはまたつらい別れをしながらも新たな旅の始まりを詠んでいることを読み取った。旅に対して単にあこがれであるとか楽しみであるとかいったようなとらえではなく、より深いところを感じさせようとしたのである。さらに、辞世の句「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」を教科書外の言葉として挙げた。これらを踏まえ、「芭蕉にとって『旅』とは人生である。」というまとめを導き出した。

#### 生徒の感想

- ・私の旅のイメージと芭蕉にとっての旅は全然違うことがわかりました。
- ・泣くほどつらいのに、何度も旅へ行くのは、芭蕉にとってそれほど旅は重要だったのだろう。
- ・芭蕉は旅を人生ととらえ夢中になっていたのすごいと思った。そういうものをもつのは大切だと思った。
- ・芭蕉さんの時代は旅をするのも一苦勞だったと思うから、本当に旅が好きで、人生だったんだろうと思った。
- ・芭蕉の生き様がかっこよかったです。
- ・芭蕉は好きで旅をしていたのだと思っていただけから旅の始めとか、「つらさ・別れのさびしさ」という気持ちがあったので少しびっくりでした。また、旅を人生と思いながら旅をしていてすごいと思いました。

- ・私にとっての旅は一人でするものと書いたけど、芭蕉にとっては人生そのもので身を切られる思いまでして旅をするのはすごいと思います。
- ・芭蕉にとっての「旅」というのは、普通の人にはまったく理解できないものだった。
- ・芭蕉さんの生きがい旅であるのなら芭蕉さんの願いは叶っているのでもとても幸せだったと思う。

#### 〈第3次「平泉」の場面を読み味わう〉

はじめに前半部分の「泪を落としはべりぬ」に注目させ、なぜ芭蕉が涙を流したのかを考えるという学習課題を設定した。その上で、「大門の跡は一里こなたにあり」などに見られる奥州藤原氏三代の栄華、また「義臣すぐつて」のあたりに見られる義経らの奮闘などを読み取った。そして、それらが「功名一時の叢」となったことに対し、杜甫の詩も思い出しながら人の世のはかなさ、無常を思う涙を流したということ、「夏草や」と「卯の花に」の二つの俳句の読み解きも踏まえてとらえさせた。後半部分では、何も残らなかった前半部分に対し、残ったものは何かという課題のもと、「五月雨の」の句も踏まえながら光堂への感動の気持ちを読み取らせた。また、平泉が世界遺産に登録されたことなど、実際に現代にも「千歳の記念」としてその姿をとどめていることについて触れ、結びとした。

#### (3) 実践を振り返って

今回の実践では、芭蕉の「旅」についての考え方を自分たちと比較してとらえることを目標とした。その中で、旅立ちの場面の中に、旅の始めと終わりの句、さらに辞世の句を織り込むことによって、さまざまな「他者の言葉」をもとに考えさせることができた。生徒の感想にも、好きで旅をしていただけでなく、つらさや寂しさといった気持ちも持っていたのだという深い読み取りができたことが表れているのではなかろうか。教科書以外の「他者の言葉」を受け止めて、より深く考えることができたのではないかと考える。

ただ、表現することがワークシートの記入と発表にとどまってしまったので、その他の表現活動を仕組んでいくことを考えていかなければならない。

また、評価についてはまだまだ不十分である。効果的な評価についても今後の課題としたい。

#### 3. 成果と課題

本研究は、さまざまな他者の言葉を「受け止め」ることでその中から課題を見つけ、「考え」て言葉を吟味し「表現する」サイクルを通して「確かな学力」の

育成のための指導の在り方を明らかにすることを第一目標としていた。古文という、現代に生きる生徒たちにはイメージしにくい世界について、さまざまな他者の言葉を「受け止め」させることにより、深く「考え」て「読むこと」ができたのではないかと考えられる。

しかしながら、「考え」たことを「表現する」際の効果的な表現方法については今後研究を進めていく必要がある。

また、評価についても評価規準や評価方法など、今後研究を進めていかなければならない課題はある。次年度以降さらに追究していきたい。

#### 4. おわりに

本研究は、三原学校園全体の研究テーマ「創造的思考力の発揮を促す保育・教科の授業」を踏まえたものである。国語科で、「他者の言葉とかかわり合いをとおして、言葉の世界をひらく」という小・中共通の教科テーマを設定し、本年度は、「受けとめる」「表現する」という二つの側面に着目した授業づくりに取り組んできた。

ここでいう「他者」とは、目の前にいる他の学習者や教師だけを指すのではない。テキストの筆者や過去の自分など、直接的には目に見えなくても、向き合うことによって、思考や認識を深め、自己を高めてくれるものすべてを指す。これらの他者と出会い、自ら問題を発見し、ともに解決していくことで、生徒たちの理解力や表現力が高まり、新たな価値の創造に向かう意欲と態度が育っていくと考えるのである。

さて、今回の二つの実践では、長く語り継がれてきた「古典」との対話に取り組んだ。親しみにくい古人の言葉や生きかたを「受けとめ」、自分の中に生まれた「考え」や「思い」を、自分の言葉で「表現する」というサイクルを活かした指導法の開発を目指したものである。

単元「姫の物語？ 翁の物語？ 一竹取物語」（中学1年）は、新学習指導要領中学校国語科第1学年の「読むこと」の指導事項「オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広げること」や、「伝統的言語文化に関する事項」の「(ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること」、「(イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること」に関わっている。実際の指導にあたっては、聴写させて仮名遣いの違いを実感させたり、暗誦を取り入れてリズムに慣れさせたりしている。

この実践の特徴は、教科書ではあまり取り上げられないことのない「五人の貴公子」について、その行動と考え方を比較させ、その「人としての汚さ」を比較させたところにある。しかも単に観念的・道徳的に善悪を判断するのではなく、登場人物に寄り添って状況を理解した上で、話し合いによって自分たちの価値基準の見直しを行っている点に、価値があると言える。

さらに、「なぜこのような物語が書かれたか」という課題に取り組むことで、物語の作者（及び伝承者）の「語り」という角度から考察を深めている点に意味がある。まさに、「他者の言葉」として「受けとめ」、自分と結び付けて考えようとしているのである。

単元「おくのほそ道」は、新学習指導要領中学校国語科第3学年の「読むこと」の指導事項「エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて、自分の意見を持つこと」や、「伝統的言語文化に関する事項」の「(ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと」、「(イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」に関わっている。実際の指導にあたっては、音読を取り入れて古典を読むことに対する抵抗感を軽減したり、現代語訳を活用して現代人の生活から類推させやすくしたりするなど、学習意欲の喚起に気を配らなければならなかったが、導入段階で、旅のルートや距離を地図で確認する作業を取り入れることによって、リアリティのある「受けとめ」方に導くことができた。

この実践の柱は、芭蕉にとって「旅」とは何かという根源的な問いについて、生徒の表現を生み出したところにある。「ひと言で言えば何か」「なぜそう言えるのか」という二段階の学習課題を設定することで、具体と抽象を往復する思考力を養うとともに、理由を明確化するという論理的な思考力を育成しているのである。その結果、生徒たちの「旅」に対する認識は改まり、芭蕉の生き方に共感を覚えるようになっていった。該当する箇所を原文から引用しながら述べるという活動も仕込まれており、今後生きる学習方法を習得したものと言える。

今後は、こうした言語活動をどのように評価していくのが課題となる。生徒の主体的な表現を導き出すことを重視する学習は、答えを一つに収斂させることはできない。クローズエンドの学習ではないから、評価規準を絞り込むことが困難なのである。その場合は、複数の観点を用意し、その組み合わせで判断することが必要になろう。評価の観点の具体化が必要である。今後さらに研究を進めていきたい。